

「第12回全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」参加報告

概要

2018年2月25日(日)～27日(火)、京都府京田辺市にて、全国から9大学、17チーム、114名の学生が参加した「第12回全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」が開催されました。参加した大学は、同志社大学、同志社女子大学、福知山公立大学、埼玉大学、日本大学、立教大学、龍谷大学、摂南大学、と大東文化大学で、本学からは、政治学科2年生木村駿介君、政治学科2年生小保方海登君、法律学科4年生進藤麻斗君の3名が参加しました。進藤君は2年前の政策フォーラムに参加して3位入賞を果たした時のメンバーで¹、今回は後輩達の育成も兼ねて参加してくれました。

当該政策フォーラムは、京田辺市全域をフィールドとして、地域が抱える多種多様な課題について調査研究を進めて問題を把握し、それを解決していくための政策を提言し、全国から参加する大学と提案する政策の質を競い合う形で進められます。フォーラムでは限られた時間の中で精力的に地域に出て調査やヒアリングを行い、プレゼン用のパワーポイントファイルまで作成していきますので、大変なハードワークとなります。限られた時間をどのように効率的に使うのかを考えて行動し、最終日の発表に向けた準備を進めていきます。それが徹夜作業になることもあります。このような極限の状況の中で、作業を進めていくことになります。よって、最終日の発表が終わったときの達成感はひとしおです。それとともに、普段教室では経験することができない実践的なスキルを積むこともでき、自らが成長を遂げていることも自覚できるものとなります。今回は政治学科のアクティブ・ラーニングではなく、藤井の呼びかけで有志が集まったという形で運営しました。自発的に参加してくれた木村君、小保方君、進藤君には敬意を表したく思います。

これまで京田辺フォーラムでは、明確なテーマは与えられず自由に設定していたのですが、今回からは、①市民への効果的な行政PRについて、②健康増進に着目したまちづくりについて、③みんなで育てる持続可能な地域交通システムによるまちづくりについて、④若い世代が起業しやすい環境づくりについて、の4つのテーマを与えられ、その中から1つを選択する形に変更されました。本学のチームは①市民への効果的な行政PRについて、を選択し、政策提言を進めていきました。

京田辺市の市報の綿密なチェック、駅前で行ったアンケート調査、担当課へのヒアリングを行って現状を分析して問題点を把握するとともに、その問題を解決していくための政策を提言しました。特に、今回のメンバーの進藤君は、「スポーツ大東」の編集長の経験者でしたので、そこで培ったノウハウを交えた政策提言を行いました。

結果、参加**17チーム中、3位に入賞**しました。他にも①のテーマを選択したチームが複数ありレベルの高い競争になりましたが、3位に入賞することができました。3人という少人数のチームでしたが、それぞれが自らの役割を認識し、それをしっかりと担っていくことで3位入賞に至りました。

参加学生は3人ともよく頑張りました。限界まで追い込まれながらも発表準備を追い、プレッシャーのかかる発表の場でも堂々と自らの政策提言を行いました。今回の経験が今後の参加学生に多大な影響を及ぼすことでしょう。

詳細につきましては、参加メンバーの進藤君が執筆した報告書に、藤井(一部は進藤君)が撮った写真を添える形で報告します。

¹ 政治学科のHPで当時の様子が公開されています。 http://www.daito.ac.jp/att/20509_00.pdf

第12回全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺に参加して

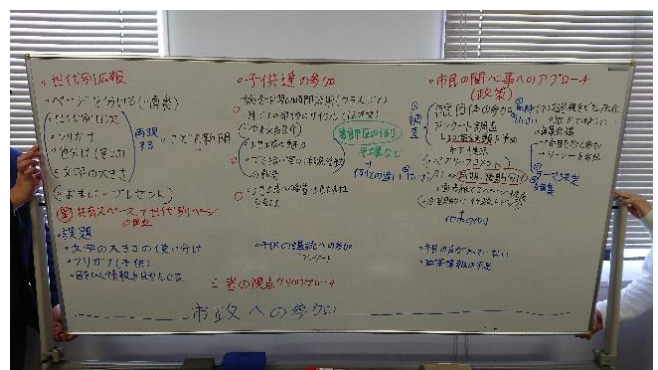
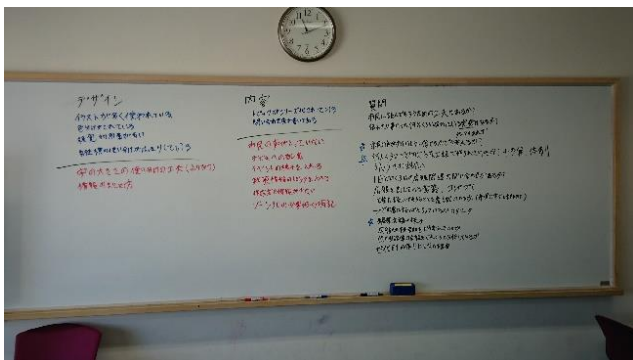
法学部法律学科4年

進藤麻斗

今回、京田辺市で行われた政策フォーラムで、3位という結果を残すことが出来ました。この報告書では、参加を決めた理由から、現地に行くまでの過程、現地での様子を通して、このフォーラムで何を心得、今後どう生かしたいのかを書いていきたいと思えます。

まず、私が参加を決めた理由は、①先生に恩返しをしたい。②卒業前にまた一步成長したい。の2点です。①の理由として、藤井先生とともにすでに2回、政策フォーラムに参加した経験があり、2回とも素晴らしい経験をさせていただきました。就職活動では、フォーラムで得た自信をもとに、希望の職種にも就くことが出来ました。そこで、最後、もう一度参加して、藤井先生に恩返しができないかと考えたのです。

メンバーは私と、2年生の木村君、小保方君の3人に決まりました。フォーラム参加チームで17チーム中2番目に少ない人数です。2月の下旬に顔合わせをし、その後、本番の25日～27日(3日間)を迎えるまでの間、3人では4回ほど、2年生の2人はその他2日集まって作業を行い、計6日間ほど事前作業に充てました。ここでは、ホワイトボードを使って議論を行うことで、3人の意思の一致や、イメージの共有が図られ、「見える化」しながら作業を進めることの重要性を感じました。



24日にも集まり作業を行い、25日、ついに京都入りです。25日(1日目)の一番の収穫は、街角インタビューを行えたことでしょう。発表テーマでもある「広報」に関して、新田辺駅で市民アンケートを敢行しました。予想ではある程度の人々が止まってくれるだろうと読んでいましたが、序盤、止まってくれるのは10に1人のペース。心は折れかけましたが、場所を変えて行くと、案外市民の皆さんが協力してくださいました。特に、私たちに熱心に市の課題を語ってくれる市民の皆さんを見て、一人ひとりが何かしらの想いをもって生活していることがわかり、とても良い経験になりました。



電車が到着して家路に就く方を待っている様子



積極的に声を掛けアンケート調査を行っている様子

26日は(2日目)は主にヒアリング調査を行いました。市役所の広報課や教育委員会の方に話を聞くにあたって、より本音であったり、深いところまで聞くために、うなずき方、質問の仕方によって差が出てくることわかりました。これは現地で「アクティブ・ラーニング」をしなければわからないことです。



広報課にてヒアリングの様子



午前中のヒアリングを終え、対策を検討する様子

その後、会場となる同志社大学構内にて、発表原稿の作成、それと同時にパワーポイントを仕上げていきます。事前準備の段階である程度構成は完成していましたが、やはりより良いものを作るには肉付けが大切です。ここでこのデータを入れるべき、この言葉を使おう、この順番がいいだろうなど、細部にこだわって仕上げていきます。もちろん、こういった作業は論文作成でも行えますが、肝心なのは「みんなでする」ことだと思います。意見は必ずしも合致はしませんが、そのたびに考え、最善の策をみんなで選ぶ作業は、一人で論文を書くよりかなり疲れますが、その分収穫は多いことでしょう。企業に入っても、必ず誰かと仕事することになり、その時の練習にはぴったりです。



発表原稿完成に向けて作業する様子



時間内に収まるか予行演習する様子

26日は結局午前0時を超え、27日の午前5時まで作業は続きました。一見つらいと思われそうですが、あとから振り返れば、あの深夜の作業が楽しかったと思えるのです。眠い目をこすりながらも、完成に向けて一丸となっていく瞬間は、過去2回のフォーラムでも大切な時間であったと思います。

1時間半睡眠をとり、ついに最終日、発表日を迎えました。少し早く会場に到着し、本番前の最終のリハーサルを行いました。私たちの班は17チーム中9番目、午前の部の最後と決まりました。各チームの趣向を凝らした発表が続きます。しかし、自分たちもいいものを作り上げた自信があり、プレッシャーはそこまで感じませんでした。



早く到着し最終リハーサルを行う様子



プレゼンテーション会場

ついに9番目、私たちの出番です。私たちは「効果的な行政PR」の実現を目指して、市民が参加できるような広報誌づくりの提言を行いました。特に最後の文章にこだわり、「広報誌によって、行動に移せずにいる『行動未済市民』の後押しをしたい」と締めくくりました。発表は2年生でリーダーでもある木村君が担当、パワーポイントは小保方君が担当し、私はステージ上で資料を掲げたり、審査員への資料配布など、「サポート役」に徹する、はずでした。実際は、質問コーナーでご指名を受け回答。発表内で、私が所属している「スポーツ大東」を題材に使ったことで、それに関して質問を頂きました。急な展開に少しドキッとしましたが、過去2回のフォーラムで培った自信をもとに、落ち着いて質問に答えることが出来ました。



発表が始まりました。木村君奮闘中です。



スポーツ大東を披露する様子



審査員の鋭い質問に回答する様子



いよいよ表彰式

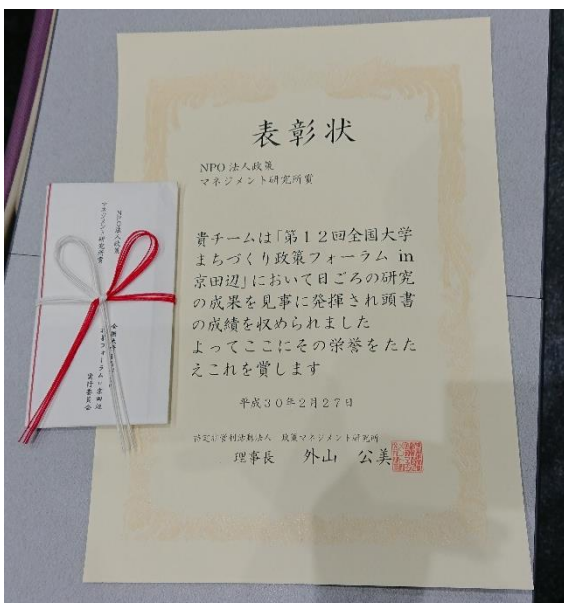
全17チームの発表が終了し、いよいよ結果発表です。今川晃賞は他大学のチームが受賞し、残りは3つの賞です。3位となる、NPO 法人政策マネジメント研究所賞の発表。ここでなぜか「呼ばれるな」とふと思いました。もちろん優勝を目指していましたが、「なんでもいいから結果が欲しい」という思いが強かったのかもしれません。結果は3位。これまでの1か月の準備や現地入りしてからの頑張りが、形になって出てくれたことに、ほっとしたのを覚えています。同時に、参加した2年生の2人が、このくらいやればこのくらいの結果になると「実感」してくれたことが、参加してよかったと思えた瞬間でした。



3位入賞!



参加メンバー



藤井のいきつけの焼肉屋でうちあげ

28日は、藤井先生が調査を行っている京丹後市大宮町の奥大野地区に、最先端のまちづくりを行っている川口区長へのヒアリングに向かいました。前日は先生も含めて大盛り上がりの打ち上げ、部屋に着くなりすぐに眠りにつき、いかに発表に向けて体力を使っていたかを実感しました。さて、28日はまず天橋立や、伊根町に向かい観光した後、奥大野地区に向かいました。奥大野地区長の川口さんは元行政マンで、生まれ故郷の奥大野を何とかしたいと立ち上がった、熱意を持った方です。一通り最近の活動を聞いた後、質疑応答に入りました。こういった「現地の生の声」を聞くことができるのも、アクティブ・ラーニングの強みです。教室では学べないことがたくさん詰まっている4日間になったと思います。川口さんの言葉で最も印象的だったのは「自分が市役所で働いた経験を、地元に戻元しなければいけないと思った」という言葉です。40年間の市役所職員時代に得たものを、地元に戻元しなければという使命感は素晴らしく、こういった人が多く出てくるのが、今後の日本の人口減社会に必要なようになってくるのではないかと感じました。



伊根町の舟屋見学（重要伝統的建造物群保存地区）



天橋立・傘松公園にて



股のぞき



奥大野自治会の川口会長よりレクチャーを受ける

計4日間の京田辺&京都でのアクティブ・ラーニング。得たものは、①「3位」までのプロセスを、4年生という少し客観的な視点で知ることが出来た。②「動くこと」で得られることがたくさんあることを知った。ということです。①に関しては、リーダーを2年生の木村君が務めたことで、少し離れたところからチームを見ることが出来ました。そのおかげで、3位という結果までチームがどう動けばいいのか、どうふるまえばいいかを、少し体感できたと思っています。②は、街頭インタビューや、ヒアリングによって得られました。街頭インタビューでは断られることも多くありましたが、見知らぬ市民に、自ら声をかけて意見を聞くのは、普段絶対にしないことです。街頭インタビューという「アクション」で、普段得られない経験をしました。また、ヒアリングでは、こちらが熱意をもって接すると、あちらも熱意をもって返してくれることがわかりました。こちら、自らが「動く」ことによって、結果が大きく変わります。

この2つは、来年からの社会人生活でも大いに生かせるのではと考えています。チームを、少し離れた客観的な立場で見ると、主観からは気づかない新しい発見があるはずです。また、まずは自分から動いてみる姿勢は、社会人1年目はもちろん、今後の人生でも生かせることが出来ると考えています。

最後に、大学生活に彩を与えてくれたこのフォーラムで、最後、力を合わせて3位という「結果」を出せたことは、私の生涯の財産になると考えています。今後、多くの大東生がこのフォーラムを通して、成長を実感して行ってほしいと強く思いました。

発表原稿

私たちは「効果的な行政PR」に関する政策を提言します。この発表にあたりましては、私たちは、まず京田辺市の広報紙を1年分通読して、広報の実態を把握しました。次に各部署への聞き取り調査を行うとともに、新田辺駅前での市民の方々へのアンケート調査を行いました。さらには、大東文化大学の学生が主体となって作成している新聞である「スポーツ大東」の編集長であったメンバーの進藤の経験も活用しました。このようなアプローチにより我々の政策を提言していこうと思います。

はじめに、広報紙を1年分通読しましたので、その中で素晴らしいと思えた点をいくつか挙げます。第1は、全編カラーで構成されているという点です。カラーであるが故にコーナーの境が分かりやすくなり、写真などが鮮明になります。第2に、記事の縦書きと横書きの使い分けがされているという点です。縦書きと横書きを使い分けることによって記事の読みやすくなりました。第3に、「京田辺で子育て」のようにシリーズ化されているトピックがあるという点です。シリーズ化によって読者が継続的に情報を得ることができるようになっています。次に、秘書広報課に聞き取り調査を行った結果、市民に自分の町に誇りを持って欲しいという意識で作成していたり、鮮度の高い情報を市民に提供するために月二回発行しているなどの工夫が見られました。作成している方が常に読者となる市民を意識した作成をしていることがわかりました。

一方、それと同時に課題が3点あると思えました。「レイアウトを活用した見易さへの工夫の不足」、「購読している子どもが少ない」、「市民の生の声が入っていない」の3つです。

まず、「レイアウトを活用した見易さへの工夫の不足」について説明します。具体的な事例として、平成29年9月1日の広報があります。2.3ページでは様々な案内が掲載されていますが、「敬老会」の案内と「子供の主張大会」の案内が並んで述べられている状況でした。他にも平成29年4月1日の6、7ページでも親子イベントの案内と健康寿命に関する案内が並んで掲載されていました。更に全体を通して文字の大きさやフォントが全て一定で、各世代ごとなどへの使い分けが見られませんでした。アンケート調査の結果、「文字が小さく見づらい」（80代男女）という意見もありました。現状として情報の纏まりに欠けていると思える点や、更に各世代に適したレイアウトの方法があるのではないかと感じました。

次に、「購読している子どもが少ない」点について説明します。アンケート調査の結果、毎号読んでいるのは多くが主婦や高齢者であることがわかりました。また、若年層の多くは年に一度、もしくは、全く読まないという回答が多くありました。このことから子供たちの購読率も低いことが予想されます。現状として京田辺市としては全世代に向けた情報を発信しているとのことでしたが、実際にはどうしても高齢者の購読の割合が高くなり、子供の購読の割合が低くなってしまいます。

最後に、「市民の生の声が入っていない」点について説明します。具体的には、平成29年7月1日の表紙では、市内の小学生チームが参加するハンドボールの全国大会の案内が特集されていましたが、選手の生の声などが無い状態でした。他にも平成29年11月1日の表紙では地域の伝統行事の案内がありましたが、こちらも参加者の感想など生の声の掲載がありませんでした。また、全体を通して、それぞれの案内や行事の活動報告などで一般の方々のコメントはあまり見られませんでした。

このような3つの課題が現在の広報紙には存在すると思えました。よって、このような課題を解決し、「効果的な行政PR」を行っていくための策として、我々は「みんなで広報計画」を提案させていただきます。この政策は3つの要素で形成されています。その要素とは、「世代別広報」、「子供の紙面作成への参加」、「市民の関心事へのアプローチ」です。それではこれらの要素を一つずつ説明していきます。

まず「世代別広報」について説明します。情報の受け手が、自らの世代に関連する情報を一目瞭然に把握することができることを趣旨として、世代ごとに情報を纏めて発信するようにレイアウトを変更していきます。各世代向けの共有スペースを確保しつつ、若年層向け、子育て世代向け、高齢者向けのようにして分けることで様々な世代の人々が自分にあった情報を得やすくなります。加えて、世代別目次を最初に入れ、情報を探しやすくします。さらに、各世代の情報の背景の色を世代が上がるにつれて濃くしていくことと、高齢者向けの情報の文字を大きくすることで、視覚的にも情報を探しやすくします。特に子供向けの情

報には振り仮名を入れ、読みやすくします。このようにすることで読み手に関連する情報を纏めて収集することができ、全世代に親しみやすい広報となっていくことが期待されます。

二つ目は「子供の紙面作成への参加」です。紙面に子どもが作成した記事を掲載し、広報が子どもにとって馴染みのあるものだと感じてもらうことを趣旨として行います。具体的には、学校での「総合学習の時間」を活用し、地域に関連する記事を作成します。それぞれの授業で記事を作成し、学校の中で一番よくできた記事を選んで頂きます。そしてその記事を広報に掲載していくことにします。現在、京田辺市には小中学校が計 12 校ありますので、各学校が 1 年を通じて 1 回記事を出していくことで、無理なく実施していくことができると見込まれます。具体的な例としては、普賢寺小学校の「総合学習の時間」を使った地域との関わりが挙げられます。普賢寺小学校では地域性を育むために地元住民との米作りや、正月遊びを教わるイベントが多く行われています。そこで、それらを体験した子供達に学んだことや、感想など、広報を通して発信してもらいます。この「子供の紙面作成への参加」のメリットは二つあります。一つは、自分達が紙面づくりに参加していることにより子供達の購読意欲が上がります。二つ目は調査や活動を通して京田辺市への愛着や地域性を育むことが見込まれます。

最後の三つ目は「市民の関心事へのアプローチ」です。我々はアンケート調査において、市民の様々な生の声を聞くことができました。そこで出された意見がこちらです。(パワーポイントに出す)

この結果から京田辺市民 1 人 1 人が何かしらの地域への課題意識を持っていることがうかがえました。中でも「道路が狭い」という意見が多くありました。そこで、この「道路が狭い」という意見を広報で特集します。ここで具体的な方法として、群馬県邑楽町の事例を参考にしつつ説明していきます。我々は「道路が狭い」というような課題に対し、市民自ら取材に関わり、作成に関わるようにすることを提案いたします。そこで、群馬県邑楽町で実施している「街角特派員」を活用します。この「街角特派員」制度とは、市民自らが市内の気になる出来事を調査していく制度です。この制度であれば、市民の意識に近いテーマを探ることができます。一例を示しますと、邑楽町の平成 28 年 10 月の広報では「街角特派員」という一般の市民から有志で参加したいと名乗り出た方々が、市民へ取材を行い、執筆、掲載まで行っています。これにより、市民の関心があることが掲載されるという流れを生むことができます。しかし、実際に行っている邑楽町でさえも、年に一回というペースとなっています。そこで我々は更に活発に展開できる方法を提案します。まず、特集のテーマの収集にあたってはインターネットや、公共施設などの意見箱を用いて市民が考える課題を収集します。テーマの決定は市民を参加させて市民と広報担当者との合議によって決定します。

次に取材を行います。ここからは「スポーツ大東」の例も交えながら紹介します。まずは「街角特派員」や市民の方が実現可能性、現状、賛否両論の声を拾うため取材に向かいます。例えば、「道路の狭さ」であれば、必要予算を担当課に聞いたり、実際の狭い道路に赴いての写真撮影、道路にお金をかけることに関しての賛否両論への取材が考えられるでしょう。また、行政側が現状、どれほどの対策を行っているのかや、その対策の限界を市民が取材することによって行政側の努力や実情を知ることができるでしょう。

続いて、編集に関しては、編集会議が重要な過程であると我々は考えています。なぜならば、「スポーツ大東」では全ての意志決定が編集会議で行われているからです。また、群馬県邑楽町では月に一回関係各課の代表が集まり、編集会議を行っています。我々は更にその編集会議に市民を参加させるべきであると考えています。

最後に掲載になります。京田辺市の広報は月に二回発行しているので、「道路が狭い」というような特集の記事は前編、後編に分け、継続的な購読を促します。また、取材課程をそのまま掲載することによって、誰がどのように取材したのかを「見える化」します。「スポーツ大東」でも特集において、わざと記者が紙面に登場することによってどのような取材を行っているかなどを見せることがあります。

以上の、テーマの決定から掲載に「市民の関心事へのアプローチ」によって市民の声を広報に反映できる他、市民の目線で情報を得ることができるでしょう。

この「世代別広報」「子供の紙面作成への参加」「市民の関心事へのアプローチ」の 3 つの提案が、京田辺市が望んでいて、かつ、今回のテーマでもある「効果的な行政 PR」の柱となりうるでしょう。しかし、我々の提案は市民が広報を読んでくれるようになることが目標ではありません。「みんなで広報計画」によって促される本当の意図は、「市政への市民の参加」です。市政への参加とは、普段、市民が地域のことを感じたり、考えたりしていることを、声にし、行動に移すことであると考えています。

ただ、実際は自ら行動に移すことは簡単なことでは無いでしょう。そこで、我々の考える新しい京田辺の広報はそんな、行動に移せていないでいる「行動未満市民」の後押しができる存在となる可能性を秘めています。「行動できる市民」になっていくことを目指して「行政PR」が効果的に行われるようになればと思っています。

以上で、私たちの発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

おわりに

今回の京田辺フォーラムへの参加は、メンバーが集まらず見送ろうと思っていましたが、私のゼミを希望した木村君、小保方君、それにこれまでフォーラムに参加してくれた進藤君が参加してくれることになり、急遽寄せ集めのメンバーで参加することになりました。皆さん目的意識を持って参加してくれましたので、直ぐにチームワークが生まれ、強い団結力でフォーラムに参加していくことになりました。また、進藤君はこれまでも登別フォーラムや京田辺フォーラムに参加してくれ、このフォーラムの意義をよく理解してくれていたため、そのような経験者がチームを支えてくれるという理想的な形でフォーラムに臨んでいくことができました。

スムーズに事前対策を行うことができ、フォーラムでも順調に準備を進め3位入賞を果たしたのは、進藤君の振る舞いが素晴らしかったということに尽きると思います。2人の2年生を立てて脇役に回り、しっかりと彼らを支えていた手腕は、今後社会で活躍するときの予行演習みたいなものであったと思えます。今後は良きリーダーとして社会で大きく羽ばたいてほしいと思います。また、木村君、小保方君は今回のフォーラムを通じて、「必死にやればできる」ということを感じて頂けたと思います。この経験を活かして、夏の登別フォーラムでチームを引っ張って行ってほしいと思います。

今後の皆さんの活躍が楽しみです。

参加学生の声

木村駿介君

私たちは「効果的な行政PR」というテーマに対して、この政策フォーラムのために集まった3人でそれぞれの長所を活かし、取り組みました。集まった当初はお互いのことがよくわからず、うまく進められるのか不安でした。しかし、経験者の進藤さんが気さくに接して下さったので、皆で同じ方向を向いて進むことができましたと思います。リーダーとして参加した私は進藤さんの存在に助けられました。

定期的集まり、朝から夕方まで、意見が出る時も行き詰まった時も皆で思案して取り組みました。特に、発表前の夜は3人で一部屋に顔を寄せ合い朝方まで最後の詰めを行いました。私は発表を行う役だったのでパワーポイントとのタイミングを合わせる練習を行いました。最終的には読み上げ中に睡魔で自分がどこまで読み上げたのか分からなくなりました。この時間はとても辛い時間でもありましたが、とても充実した時間でした。

発表当日、他のチームが発表していくのを見ると緊張が増していきました。「隣の芝は青く見える」とはよく言ったもので他の発表がどれも良く感じました。いざ発表となった時、今までの準備期間の日々を思い出しました。ステージに立つと審査員の方々の顔が真っ先に目に入りました。発表ではとにかく、伝えたいことを目の前の審査員に伝えきることに努めました。しかし、緊張のためなのか、口調が早くなってしまったことが後悔と言えます。

結果発表までの時間、私は口調が早くなってしまったことをずっと考えていました。結果は「NPO法人政策マネジメント賞」を受賞できました。私はまさか呼ばれるとは思っていなかったのが驚きました。とっさに左右に座っていたチームメイトの顔を見て、この2人と一緒にここまでやってきたことを再認識しました。舞

台上上がると今まで努力してきたことがこうして評価されることがこんなにも嬉しいことなのだと思うと涙が出そうになりました。

そして、様々面からサポートして下さった藤井先生への感謝の気持ちも大いに感じました。

私は「全国大学まちづくり政策フォーラム in 京田辺」に参加し、大学の講義では経験することができない様々なことを経験できました。今までは授業において知識の面で地方自治について学びました。しかし、現実が分からないので今一つイメージができないということがありました。今回の政策フォーラムを通して市民の方々へのアンケート調査、市役所へのヒアリングなどを行って現場の生の声を聞き、より地方自治が明確に認識できるようになりました。

知識から体験へと移すことによって、より学んだことを身に付けることができ、さらなる学びへと繋がると思います。

小保方海登君

今回の京田辺フォーラムでは「NPO 法人政策マネジメント研究所賞」という立派な賞をいただくことができました。1ヶ月間の事前準備や現地調査に加えスポーツ大東元編集長の進藤さんのお力添えのおかげで受賞できたのだと思います。

事前準備では各自治体に自ら連絡を取り質問をしたり、こんな意見箱が多いのではないかと予想をたてたりしましたが、現地で実際に調査してみると予想外の答えがあったりと私たちがインターネットや資料で調べたものとは異なる新発見ができ大変なこともあったが楽しみでもありました。今回、「効果的な行政PR」の研究を通して京田辺の広報を読み込むうちに自分の自治体の広報を意識して読むようになり、他の自治体の広報を注意深く読むようになりました。また、各自治体との連絡のやり取りや、現地で実際に聴き取り調査を行い、壇上に上がって発表した経験は自分が社会に出たときに生きるものだと思っています。

次回の登別のフォーラムでも今回の経験を活かして、さらに良い賞が取れるよう目指したいです。